発掘調査の概要

甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第177次）

甘樫丘は飛鳥川の西岸に位置する丘陵で、『日本書紀』には、皇極天皇3年（644）に蘇我蝦夷（えみし）・入鹿（いるか）の邸宅が営まれたことが記されています。

丘陵東麓の谷におけるこれまでの調査で、7世紀前半から8世紀初頭にかけて、大規模な造成をともなう活発な土地利用がおこなわれていたことが判明しています。今回の調査は、これまでの調査地より北に位置する小さな谷と、その西側の斜面と尾根の上でおこないました。斜面と尾根上の調査区では遺構は確認されませんでしたが、谷部では古代の遺構を確認しました。調査は2012年12月に開始し、途中2か月間の中断を経て、2013年11月に終了しました。

調査の結果、谷は本来北西から南東に傾斜する地形でしたが、高いところは地面を削り、低い部分は埋め立てて広い平坦面を造るという大規模な土地造成をおこなっていたことがわかりました。そして、平坦面に掘立柱建物や、溝等を造っていました。これらの具体的な利用方法はわかりませんが、数回の遺構変遷が確認できました。谷を埋め立てた土に含まれる遺物と、廃絶後に遺構全体を覆う土に含まれる遺物が、いずれも7世紀中頃までのものであることから、この谷は7世紀中頃の短い期間のみ使用されていたとみられます。

また、このような小さな谷でも大がかりな土地造成をおこなっていたことから、これまでの調査とあわせ、甘樫丘では7世紀代に広い範囲で土地開発がなされていた可能性が高まりました。今後、甘樫丘の造成の全体像があきらかになることが期待されます。

（都城発掘調査部　大林 潤）

調査区全景（北東から）

藤原京右京七条一坊の調査（飛鳥藤原第178-2次）

大和平野では、農業用水利施設（吉野川分水）の整備をおこなうことで、農業用水の安定供給と適正利用を図る大和紀伊平野農業水利事業が実施されています。今回の調査は、その事業の一環である、大和平野支線水路の改修工事にともなうものです。

調査地は、藤原宮の南に接する藤原京右京七条一坊という一等地にあたり、調査期間は2013年8月5日から9月13日までです。過去の調査成果から、調査区内には、西一坊大路と六条大路の道路側溝がとおると推測できましたが、調査区は東西の幅約1.5m、南北の長さ約110mという非常に狭く細長い形で、果たして想定どおり道路側溝が見つかるかどうか、わかりませんでした。

調査の結果、調査区中央付近で、東西溝を検出しました。その位置関係から、六条大路の南側溝である可能性が高い溝です。

また、調査区北側では、東西溝を2条、南北溝を1条検出しました。東西溝は、2条のうちのどちらかが、六条大路の北側溝であると考えられます。南北溝は、北でやや東にふれる直線的にのびる溝で、南北30mにわたり確認できました。検出位置は、西一坊大路東側溝の想定位置とほぼ一致しています。このことから、この南北溝は、西一坊大路東側溝の可能性が高いと考えています。

今回の調査区は、幅が狭く、更に遺構面は、近現代の攪乱により多くの削平を受けていました。そのような中でも、六条大路と西一坊大路の道路側溝と考えられる遺構を確認することができました。小規模な調査でも、藤原京の構造を理解する上で重要な成果が得られたことを嬉しく思います。

（都城発掘調査部　若杉 智宏）

調査区北側の完掘状況（南から、後方は耳成山）